西田文学読書会　　　　　　2023.2.18（土）～3時45分

「1963／1982年のイパネマ娘」（１）

岡部・渡辺・奈原・佐野・田中・行武・大藤・本田・楯谷

■「1963／1982年のイパネマ娘」とはどういう存在か？

・渡辺：作品の最初に掲げられているのは歌詞か？

・村上：歌詞そのものではないが、歌詞の内容をほぼなぞったものと思う

・佐野：聴いているレコードの中に出て来る娘

形而上学的な女の子

しっくりきすぎてしまった。

古いレコードの音が生々しく聞こえてくる。その世界の中に（自分自身も演奏者も）いるなという思い

・脈絡のない記憶が浮かび上がることもしっくりくる

・渡辺：高校の廊下

けだるい歌声が高校の廊下とがつながっていると感じる。雰囲気的に

・岡部：わかりやすい、大学出の生臭坊主（哲学的言説）

・渡辺：昔むかし～あたりから何のことかと思い始めた

・奈原：しっくりきました　知情意において主客合一というか、しっくりきて、半世紀前でも現在のことのように思われる（染みついたものがある）。音楽＝音と詩と記憶が一体となって、

形而上学が７回出てきた＝解釈しろと言われるとしゃべりたくなくなる

・田中：正直よくわからない。全体の時間の流れを見ると、

〇１９６３年のイパネマの娘

　高校の廊下　サラダ　女の子

〇１９８２年イパネマの娘との再会　変わっていない＝形而上学的

〇現在＝地下鉄の車両の中

〇「結び目」

・行武：形而上学的な娘（物質的なモノを超える・超現実的）

　　高校の廊下・　サラダ＝形而下的、日常的生活的

　　「高校の廊下」で二つの世界が結びついている＝分かるような気がする

　　僕の結び目　＝僕と僕自身の結び目？

　　「形而上学的な足の裏」とは？　？？？？

・大藤：豊かだなあ。行かれているというよりは、そういう人生っていいなあ。

・本田：この小説を高校1年生の時に読んで、イパネマ娘と１００㌫はとても面白いと思った。「形而上学的」という言葉とボサノバに出会った。形而上学的な「足の裏」というのが面白い。

・どんどん歩いていかなくてはいけない

＝人生を主体的？に生きるたとえ

＝物理的に歩くことはできるけれども、主体的に生きることはできない彼女

＝砂浜をただ歩きつづけることが彼女の使命（音楽を聴く人に状況を提供する使命）

＝意思がない、空っぽな存在

＝浜辺を歩くしか選択肢はない

＝「ソフィーの世界」の登場人物が生きているといえるのか？

＝生きていないのか生きていない

＝村上春樹は主体的に生きていない人への皮肉

＝高校生は単に学校へ行ってご飯食べるだけ

＝レールの上に載って何も考えずに生きていく生き方

＝生きていくとは何かという問題

＝僕は僕自身である

＝奇妙な場所

＝西田幾多郎っぽい

自分の力で何かを変えることができる？

何かをつかめる瞬間があるのだろうなあ？

＝「レコードが持っている形而上学世界」と「個人個人がもっている形而上学的世界」が同じかどうか？

「個人個人がもっている形而上学的世界」よりもっと大きな形而上学的世界がある可能性がある。

・楯谷：モデル＝イパネマの美少女と形而上学を結びつける意外な取り合わせ＝村上春樹の手腕

誰でもみんな既にイパネマ娘に出会っている

文学の中での「形而上学」という言葉だから厳密にかんがえてはならない

イパネマ娘には形がありまくり、すくなくともイメージはある

イパネマ娘＝イメージは頭に浮かぶ＝形はある

形而上学的＝永遠の美少女＝歳をとらない存在

音楽と歌詞と女性への恋心が混然一体となって海辺を歩いている美少女を思い浮かべて良いなあと思う

＝大藤さんもきれいな女の人を良いなあと思った経験が一度でもあれば、出会っているといえるはず

僕も出あっていて、サラダの女の子、地下鉄で出会った良いなあと思った女の人＝イパネマの娘

1963年と1982年

僕＝村上春樹＝30歳代＝立体的な

いっしょにビールを飲むのは僕の心象風景（結び目を想像してみる）

音楽が結び目の呼び水になっている

自分と何かが結びついている

その結び目の一つを見せているのがこの一緒にビールを飲むシーン

高校の廊下湿っぽい閉鎖的空間

↔ブラジルの海岸の理想的イメージ

形がないはずのモノ＝いろいろな女性のイメージをピュアなものにして心の中にもっているから、音楽を聴いたときのイメージ

「形而上学的な女の子」という言葉をどう受け止めるか？

どこにもいないがどこにでもいる。

男性は永遠の女性を追い求める＝形而下的に求めると女たらし（光源氏）。僕は出会う女性を自分のモノにしたがㇽことで悲劇が起こる。形而上学的な女の人と思っていたら、形而下的な満足を求めたら破綻すると知ってたら、あんなことにはならない。僕の心の中にもぐって、その結び目とであって、ビールを飲んだら、これは賢いが、ここでおしまいだ。

この小説が表現するのは、音楽と結びついた形而上学的なイメージ＝「人間の本質は複合性にあるのよ」と彼女は言う。「人間科学の対象は客体にではなく、身体のうちにとりこまれた主体にあるのよ」という彼女の言葉を展開するところにこの小説の意味がある。

佐野：哲学を始めたらだめだというブレーキを感じる。形而上学的という言葉を聴いても哲学したくなるから逆に駄目だろうと思う。考え始めたら「思弁」になる。

岡部：「とにかく生きなさい」への違和感＝引きます

哲学的なアプローチ

僕は僕自身が出会うことについては僕の夢想のレベル

■第２回読書会（３月18日）に向けて

⦿この作品は、1963年世界的に大ヒットした「イパネマの娘」のレコードを語り手「僕」が1982年に聴いたことを題材にしている。

・人がレコードで音楽を聴くことそれ自体は特に珍しくない日常的体験である。

・では、そこで「どういうこと」が起こっているのか（作品内容）？

・そこで「起こっていること」を、この作品は「どのように」表現しているのか（作品形式）？

・そのような、内容と形式の出会いにはどのような意義があるのか？　あるいはないのか？

■「1963／1982年のイパネマ娘」読書会予定

２月18日（土）第１回読書会

３月18日（土）第２回読書会

４月8日（土）レポート提出期限

４月15日（土）第３回読書会

＊どうぞよろしくお願いします。

【『村上春樹全作品』版】

として、日に焼けた

若くて綺麗なイパネマ娘が

歩いていく。

歩き方はサンバのリズム

クールに揺れて

やさしく振れる。

好きだと言いたいんだけれど

僕のハートをあげたいんだけれど

彼女は僕に気づきもしない。

ただ、海を見ているだけ

　1963年、イパネマの娘はこんな具合に海を見つめていた。そしていま1982年のイパネマ娘もやはり同じように海を見つめている。彼女はあれから年をとらないのだ。彼女はイメージの中に封じ込められたまま、時の海の中をひっそりと漂っている。もし年をとっていたとしたら、彼女はもうかれこれ四十に近いはずだ。もちろんそうじゃないということもあり得るだろうけれど、彼女はもはやすらりとして84もいないだろうし、それほど日焼けもしてはいないだろう。彼女にはもう三人も子供がいるし、日焼けは肌を傷めるのだ。まだそこそこに綺麗かもしれないけれど、二十年前ほど若くはない―いうことだ。

　しかしレコードの中では彼女はもちろん年をとらない。スタン・ゲッツのヴェルヴェットのごときテナー・サクソフォンの上では、彼女はいつも十八で、クールでやさしいイパネマ娘だ。僕がターン・テーブルにレコードを載せ、針を落とせば彼女はすぐに姿を現わす。

好きだと言いたいんだけれど

僕のハートをあげたいんだけれど……

この曲を聴くたびに僕は高校の廊下を思い出す。暗くて、少し湿った、高校の廊下だ。天井は高く、コンクリートの床を歩いていくとコツコツと音が反響する。北側には幾つか窓があるのだが、すぐそばまで山がせまっているものだから、廊下はいつも暗い。そして大抵いつもしんとしている。少なくとも僕の記憶の中では廊下は大抵いつもしんとしている。

　なぜ「イパネマの娘」を耳にするたびに高校の廊下を思い出すことになるのか、僕にはよくわからない。脈絡なんてまるでないのだ。いったい1963年のイパネマ娘は、僕の意識の井戸にどんな小石を放り込んでいったのだろう？

　高校の廊下といえば、僕はコンビネーション・サラダを思い出す。レタスとトマトとキュウリとピーマンとアスパラガス、輪切りたまねぎ、そしてピンク色のサザン・アイランド・ドレッシング。もちろん高校の廊下のつきあたりにサラダ専門店があるわけじゃない。高校の廊下のつきあたりにはドアがあって、ドアの外にはあまりぱっとしない25メートル・プールがあるだけだ。85

　どうして高校の廊下が僕にコンビネーション・サラダを思い出させるのだろうか？　ここにもやはり脈絡なんてない。そのふたつはたまたま何かの加減で結びついてしまったのだ。ペンキ塗りたてのベンチに知らずに腰をおろしてしまった不運なご婦人のように。

　コンビネーション・サラダが僕に思い出させるのは昔ちょっと知っていた女の子である。この連想はとても筋がとおっている。なぜなら彼女はいつも野菜サラダばかり食べていたからだ。

「もう、バリバリ、英語のレポート、バリバリ、済ませた？」

「バリバリ、いやまだ、バリバリ、少し、バリバリバリ、残ってるな」

　僕も野菜はけっこう好きな方だったから、彼女と顔を合わせればそんな風に野菜ばかり食べていた。彼女はいわゆる信念の人で、野菜をバランスよく食べてさえいれば全てはうまくいくものと信じ切っていた。人々が野菜を食べつづける限り世界は美しく平和であり、健康で愛に満ちあふれているであろう、と。なんだか「いちご白書」みたいな話だ。

「昔むかし」とある哲学者が書いている。「物質と記憶とが形而上学的深淵によって分かたれていた時代があった」

　1963／1982年のイパネマ娘は形而上学的な熱い砂浜を音もなく歩きつづけている。とても長い砂浜で、そこには穏やかな白い波が打ちよせている。風はまるでない。水平線の上には何も見えない。潮の匂いがする。太陽はひどく暑い。

　僕はビーチ・パラソルの下に寝転んでクーラー・ボックスから缶ビールを取り出し、ふたをあける。彼女はまだ歩きつづけている。彼女の日焼けした長身には原色のビキニがぴたりとはりついている。

「やあ」と僕は声をかけてみる。86

「こんちは」と彼女は言う。

「ビールでも飲まない？」と僕は誘ってみる。

彼女は少し迷う。でも彼女だって歩き疲れている。喉だって乾いている。「いいわね」と彼女は言う。

　そして我々はビーチ・パラソルの下で一緒にビールを飲む。

「ところで」と僕は言う。「たしか1963年にも君をみかけたよ。同じ場所で、同じ時間にね」

「ずいぶん古い話じゃないこと？」と言って彼女は少し首をかしげる。

「そうだね」と僕は言う。「たしかにずいぶん古い話だ」

　彼女は一息でビールを半分飲み、缶にぽっかりと開いた穴を眺める。それはごく普通の缶ビールの穴だ。でも彼女がじっと見ていると、それはすごく意味のあるもののように思える。世界じゅうがすっぽりとそこに入ってしまいそうに思える。

「でも会ったかもしれないわね。1963年でしょ？　えーと、1963年……うん、会ったかもしれない」

「君は年をとらないんだね？」

「だって私は形而上学的な女の子なんだもの」

　僕は肯く。「あの頃の君は僕になんて気づきもしなかったよ。君はいつもいつも海ばかり見てた」

「あり得るわね」と彼女は言った。そして笑った。素敵な笑顔だった。でも彼女はたしかに少し悲しげに見えた。「たしかに海ばっかり見ていたかもしれない。その他には何も見ていなかったかもしれない」

　僕は自分のためにビールを開け、彼女にも勧めてみた。でも彼女は首を振った。それほどたくさんビールは飲めないのだと彼女は言った。「ありがとう。でもこれからまだずっと歩いていかなくちゃならないから」と彼女は言った。87

「そんなにずっと歩いていて、足の裏が熱くならないの？」と僕は訊いた。

「大丈夫よ。私の足の裏はとても形而上学的にできているから。見てみる？」

「うん」

　彼女はすらりとした足を伸ばして、足の裏を僕に見せてくれた。それはたしかに素晴らしく形而上学的な足の裏だった。僕はそこにそっと指を触れてみた。熱くもないし、冷たくもない。彼女の足の裏に指を触れると、微かな波の音がした。波の音までもが、とても形而上学的だ。

　僕はしばらく目を閉じていた。それから目を開けて、冷えたビールをひとくち飲んだ。太陽はぴくりとも動かなかった。時間さえもが止まっていた。まるで鏡の中に吸いこまれてしまったようだ。

「君のことを考えるたびに、僕は高校の廊下を思い出すんだ」と僕は思いきって言う。「どうしてだろうね？」

「人間の本質は複合性にあるのよ」と彼女は言う。「人間科学の対象は客体にではなく、身体のうちにとりこまれた主体にあるのよ」

「ふうん」と僕は言う。

「とにかく生きなさい。生きる、生きる、生きる。それだけ。生きつづけるのが大事なことなのよ。私にはそれだけしか言えない。私はただの―形而上学的な足の裏を待った女の子なの」

　そして1963／1982年のイパネマ娘はももについた砂を払い、立ちあがる。「ビールをどうもありがとう」

「どういたしまして」

88

　時々、ほんのたまにだけれど、地下鉄の車両の中で彼女の姿をみかけることがある。僕は彼女を知っているし、彼女は僕を知っている。そのたびに彼女は〈あの時はビールをどうもありがとう〉式の微笑を僕に送ってくれる。あれ以来我々はもうことばは交わさないけれど、それでも僕らの心はどこかでつながっているんだという気はする。どこでつながっているのかは僕にはわからない。きっとどこか遠い世界にある奇妙な場所にその結びめはあるのだろう。

僕はその結び目を想像してみる。そんな風に考えていると、いろんなことが、いろんなものが少しずつ懐かしく思えてくる。どこかにきっと僕と僕自身をつなぐ結び目だってあるはずなのだ。きっといつか、僕は遠い世界にある奇妙な場所で僕自身に出会うだろう、という気がする。そしてそれはできることなら暖かい場所であってほしいと思う。もしそこに冷えたビールが何本かあるなら、もう言うことはない。そこでは僕は僕自身であり、僕自身は僕である。主体は客体であり、客体は主体である。そのふたつのあいだにはどのような種類のすきまもない。ぴたっと見事にくっついている。そういう奇妙な場所がきっとどこかにあるはずなのだ。

＊

　1963／1982年のイパネマ娘は今も熱い砂浜を歩きつづける。レコードの最後の一枚が擦り切れるまで、彼女は休むことなく歩きつづける。

僕と僕自身が離れていることの苦しみ

物質と記憶が離れる深淵

【『村上春樹全作品』版・『講談社文庫』版・二版対比】

1963／1982年のイパネマ娘

83

~~「~~すらりとして、日に焼けた

若くて綺麗なイパネマ娘が

歩いていく。

歩き方はサンバのリズム

クールに揺れて

やさしく振れる。

好きだと言いたいんだけれど

僕のハートをあげたいんだけれど

彼女は僕に気づきもしない。

ただ、海を見ているだけ~~」~~

　1963年、イパネマの娘はこんな具合に海を見つめていた。そしていま1982年のイパネマ娘もやはり同じように海を見つめている。彼女はあれから年をとらないのだ。彼女はイメージの中に封じ込められたまま、時の海の中をひっそりと漂っている。もし年をとっていたとしたら、彼女はもうかれこれ四十に近いはずだ。もちろんそうじゃないということもあり得るだろうけれど、彼女はもはやすらりとして84もいないだろうし、それほど日焼けもしてはいないだろう。彼女にはもう三人も子供がいるし、日焼けは肌を傷めるのだ。まだそこそこに綺麗かもしれないけれど、二十年前ほど若くはない―いうことだ。

　しかしレコードの中では彼女はもちろん年をとらない。スタン・ゲッツのヴェルヴェットのごときテナー・サクソフォンの上では、彼女はいつも十八で、クールでやさしいイパネマ娘だ。僕がターン・テーブルにレコードを載せ、針を落とせば彼女はすぐに姿を現わす。

~~「~~好きだと言いたいんだけれど

僕のハートをあげたいんだけれど……~~」~~

この曲を聴くたびに僕は高校の廊下を思い出す。暗くて、少し湿った、高校の廊下だ。天井は高く、コンクリートの床を歩いていくとコツコツと音が反響する。北側には幾つか窓があるのだが、すぐそばまで山がせまっているものだから、廊下はいつも暗い。そして大抵いつもしんとしている。少なくとも僕の記憶の中では廊下は大抵いつもしんとしている。

　なぜ「イパネマの娘」を耳にするたびに高校の廊下を思い出すことになるのか、僕にはよくわからない。脈絡なんてまるでないのだ。いったい1963年のイパネマ娘は、僕の意識の井戸にどんな小石を放り込んでいったのだろう？

　高校の廊下といえば、僕はコンビネーション・サラダを思い出す。レタスとトマトとキュウリとピーマンとアスパラガス、輪切りたまねぎ、そしてピンク色のサザン・アイランド・ドレッシング。もちろん高校の廊下のつきあたりにサラダ専門店があるわけじゃない。高校の廊下のつきあたりにはドアがあって、ドアの外にはあまりぱっとしない25メートル・プールがあるだけだ。85

　どうして高校の廊下が僕にコンビネーション・サラダを思い出させるのだろうか？　ここにもやはり脈絡なんてない。そのふたつはたまたま何かの加減で結びついてしまったのだ。ペンキ塗りたてのベンチに知らずに腰をおろしてしまった不運なご婦人のように。

　コンビネーション・サラダが僕に思い出させるのは昔ちょっと知っていた女の子である。~~しかし~~この連想はとても筋がとおっている。なぜなら彼女はいつも野菜サラダばかり食べていたからだ。

「もう、バリバリ、英語のレポート、バリバリ、済ませた？」

「バリバリ、いやまだ、バリバリ、少し、バリバリバリ、残ってるな」

　僕も野菜はけっこう好きな方だったから、彼女と顔を合わせればそんな風に野菜ばかり食べていた。彼女はいわゆる信念の人で、野菜をバランスよく食べてさえいれば全てはうまくいくものと信じ切っていた。人々が野菜を食べつづける限り世界は美しく平和であり、健康で愛に満ちあふれているであろう、と。なんだか「いちご白書」みたいな話だ。

「昔むかし」とある哲学者が書いている。「物質と記憶とが形而上学的深淵によって分かたれていた時代があった」

　1963／1982年のイパネマ娘は形而上学的な熱い砂浜を音もなく歩きつづけている。とても長い砂浜で、そこには穏やかな白い波が打ちよせている。風はまるでない。水平線の上には何も見えない。潮の匂いがする。太陽はひどく暑い。

　僕はビーチ・パラソルの下に寝転んでクーラー・ボックスから缶ビールを取り出し、ふたをあける。~~もう何本飲んでしまったかな？　５本、６本？　まあ、いいや。どうせすぐに汗になって出ていってしまうんだ。~~彼女はまだ歩きつづけている。彼女の日焼けした長身には原色のビキニがぴたりとはりついている。

「やあ」と僕は声をかけてみる。86

「こんちは」と彼女は言う。

「ビールでも飲まない？」と僕は誘ってみる。

彼女は少し迷う。でも彼女だって歩き疲れている。喉だって乾いている。「いいわね」と彼女は言う。

　そして我々はビーチ・パラソルの下で一緒にビールを飲む。

「ところで」と僕は言う。「たしか1963年にも君をみかけたよ。同じ場所で、同じ時間にね」

「ずいぶん古い話じゃないこと？」と言って彼女は少し首をかしげる。

「そうだね」と僕は言う。「たしかにずいぶん古い話だ」

　彼女は一息でビールを半分飲み、缶にぽっかりと開いた穴を眺める。それはごく普通の缶ビールの穴だ。でも彼女がじっと見ていると、それはすごく意味のあるもののように思える。世界じゅうがすっぽりとそこに入ってしまいそうに思える。

「でも会ったかもしれないわね。1963年でしょ？　えーと、1963年……うん、会ったかもしれない」

「君は年~~齢~~をとらないんだね？」

「だって私は形而上学的な女の子なんだもの」

　僕は肯く。「あの頃の君は僕になんて気づきもしなかったよ。君はいつもいつも海ばかり見てた」

「あり得るわね」と彼女は言った。そして笑った。素敵な笑顔だった。でも彼女はたしかに少し悲しげに見えた。「たしかに海ばっかり見ていたかもしれない。その他には何も見ていなかったかもしれない」

~~「ねえ、ビールもう一本もらえる？」~~

~~「いいとも」と僕は言って、缶のふたを取ってやった。「あれからずっと砂浜を歩いてるんだろう？」~~

~~「そうよ」~~

　僕は自分のためにビールを開け、彼女にも勧めてみた。でも彼女は首を振った。それほどたくさんビールは飲めないのだと彼女は言った。「ありがとう。でもこれからまだずっと歩いていかなくちゃならないから」と彼女は言った。87

「そんなにずっと歩いていて、足の裏が熱くならないの？」と僕は訊いた。

「大丈夫よ。私の足の裏はとても形而上学的にできているから。見てみる？」

「うん」

　彼女はすらりとした足を伸ばして、足の裏を僕に見せてくれた。それはたしかに素晴らしく形而上学的な足の裏だった。僕はそこにそっと指を触れてみた。熱くもないし、冷たくもない。彼女の足の裏に指を触れると、微かな波の音がした。波の音までもが、とても形而上学的だ。

　僕はしばらく目を閉じていた。それから目を開けて、~~彼女と僕は何も言わずに~~冷えたビールをひとくち飲んだ。太陽はぴくりとも動かなかった。時間さえもが止まっていた。まるで鏡の中に吸いこまれてしまったようだ。

「君のことを考えるたびに、僕は高校の廊下を思い出すんだ」と僕は思いきって言う。「どうしてだろうね？」

「人間の本質は複合性にあるのよ」と彼女は言う。「人間科学の対象は客体にではなく、身体のうちにとりこまれた主体にあるのよ」

「ふうん」と僕は言う。

「とにかく生きなさい。生きる、生きる、生きる。それだけ。生きつづけるのが大事なことなのよ。私にはそれだけしか言えない。私はただの―形而上学的な足の裏を待った女の子なの」

　そして1963／1982年のイパネマ娘はももについた砂を払い、立ちあがる。「ビールをどうもありがとう」

「どういたしまして」

88

　時々、ほんのたまにだけれど、地下鉄の車両の中で彼女~~に出会う~~の姿をみかけることがある。僕は彼女を知っているし、彼女は僕を知っている。そのたびに彼女は〈あの時はビールをどうもありがとう〉式の微笑を僕に送ってくれる。あれ以来我々はもうことばは交わさないけれど、それでも僕らの心はどこかでつながっているんだという気はする。どこでつながっているのかは僕にはわからない。きっとどこか遠い世界にある奇妙な場所にその結びめはあるのだろう。

僕はその結び目を想像してみる。~~そしてその結びめはまた別のどこかで高校の廊下やコンビネーション・サラダに、あるいは菜食主義者の「いちご白書」的女の子につながっているのだ。~~そんな風に考えていると、いろんなことが、いろんなものが少しずつ懐かしく思えてくる。どこかにきっと僕と僕自身をつなぐ結び目だってあるはずなのだ。きっといつか、僕は遠い世界にある奇妙な場所で僕自身に出会うだろう、という気がする。そしてそれはできることなら暖かい場所であってほしいと思う。もしそこに冷えたビールが何本かあるなら、もう言うことはない。そこでは僕は僕自身であり、僕自身は僕である。主体は客体であり、客体は主体である。そのふたつのあいだにはどのような種類のすきまもない。ぴたっと見事にくっついている。そういう奇妙な場所がきっとどこかにあるはずなのだ。

＊

　1963／1982年のイパネマ娘は今も熱い砂浜を歩きつづける。レコードの最後の一枚が擦り切れるまで、彼女は休むことなく歩きつづける。

【講談社文庫】

1963／1982年のイパネマ娘

「すらりとして、日に焼けた

若くて綺麗なイパネマ娘が

歩いていく。

歩き方はサンバのリズム

クールに揺れて

やさしく振れる。

好きだと言いたいんだけれど

僕のハートをあげたいんだけれど

彼女は僕に気づきもしない。

ただ、海を見ているだけ」

　1963年、イパネマの娘はこんな具合に海を見つめていた。そしていま1982年のイパネマ娘もやはり同じように海を見つめている。彼女はあれから歳をとらないのだ。彼女はイメージの中に封じ込められたまま、時の海の中85をひっそりと漂っている。もし齢をとっていたとしたら、彼女はもうかれこれ四十に近いはずだ。もちろんそうじゃないということもあり得るだろうけれど、彼女はもはやすらりとしてもいないだろうし、それほど日焼けもしてはいないだろう。彼女にはもう三人も子供がいるし、日焼けは肌を傷めるのだ。まだそこそこに綺麗かもしれないけれど、二十年前ほど若くはない―いうことだ。

　しかしレコードの中では彼女はもちろん齢をとらない。スタン・ゲッツのヴェルヴェットのごときテナー・サクソフォンの上では、彼女はいつも十八で、クールでやさしいイパネマ娘だ。僕がターン・テーブルにレコードを載せ、針を落とせば彼女はすぐに姿を現わす。

「好きだと言いたいんだけれど

僕のハートをあげたいんだけれど……」

　この曲を聴くたびに僕は高校の廊下を思い出す。暗くて、少し湿った、高校の廊下だ。天井は高く、コンクリートの床を歩いていくとコツコツと音が反響する。北側には幾つか窓があるのだが、すぐそばまで山がせまっているものだから、廊下はいつも暗い。そして大抵はしんとしている。少なくとも僕の記憶86の中では廊下は大抵しんとしている。

　なぜ「イパネマの娘」を耳にするたびに高校の廊下を思い出すことになるのか、僕にはよくわからない。脈絡なんてまるでないのだ。いったい1963年のイパネマ娘は、僕の意識の井戸にどんな小石を放り込んでいったのだろう？

　高校の廊下といえば、僕はコンビネーション・サラダを思い出す。レタスとトマトとキュウリとピーマンとアスパラガス、輪切りたまねぎ、そしてピンク色のサザン・アイランド・ドレッシング。もちろん高校の廊下のつきあたりにサラダ専門店があるわけじゃない。高校の廊下のつきあたりにはドアがあって、ドアの外にはあまりぱっとしない25メートル・プールがあるだけだ。

　どうして高校の廊下が僕にコンビネーション・サラダを思い出させるのだろうか？　ここにもやはり脈絡なんてない。

　コンビネーション・サラダが僕に思い出させるのは昔ちょっと知っていた女の子である。

　しかしこの連想はとても筋がとおっている。なぜなら彼女はいつも野菜サラダばかり食べていたからだ。

「もう、バリバリ、英語のレポート、バリバリ、済ませた？」

「バリバリ、いやまだ、バリバリ、少し、バリバリバリ、残ってるな」87

　僕も野菜はけっこう好きな方だったから、彼女と顔を会わせればそんな風に野菜ばかり食べていた。彼女はいわゆる信念の人で、野菜をバランスよく食べてさえいれば全てはうまくいくものと信じ切っていた。人々が野菜を食べつづける限り世界は美しく平和であり、健康で愛に満ちあふれているであろう、と。なんだか「いちご白書」みたいな話だ。

「昔むかし」とある哲学者が書いている。「物質と記憶とが形而上学的深淵によって分かたれていた時代があった」

　1963／1982年のイパネマ娘は形而上学的な熱い砂浜を音もなく歩きつづけている。とても長い砂浜で、そこには穏やかな白い波が打ちよせている。風はまるでない。水平線の上には何も見えない。潮の匂いがする。太陽はひどく暑い。

　僕はビーチ・パラソルの下に寝転んでクーラー・ボックスから缶ビールを取り出し、ふたをあける。もう何本飲んでしまったかな？　５本、６本？　まあ、いいや。どうせすぐに汗になって出ていってしまうんだ。

　彼女はまだ歩きつづけている。彼女の日焼けした長身には原色のビキニがぴたりとはりついている。88

「やあ」と僕は声をかけてみる。

「こんちは」と彼女は言う。

「ビールでも飲まない？」と僕は誘ってみる。

「いいわね」と彼女は言う。

　そして我々はビーチ・パラソルの下で一緒にビールを飲む。

「ところで」と僕は言う。「たしか1963年にも君をみかけたよ。同じ場所で、同じ時間にね」

「ずいぶん古い話じゃないこと？」

「そうだね」

　彼女は一息でビールを半分飲み、缶にぽっかりと開いた穴を眺める。

「でも会ったかもしれないわね。1963年でしょ？　えーと、1963年……うん、会ったかもしれない」

「君は年齢をとらないんだね？」

「だって私は形而上学的な女の子なんだもの」

「あの頃の君は僕になんて気づきもしなかったよ。いつもいつも海ばかり見てた」

「あり得るわね」と彼女は言った。そして笑った。「ねえ、ビールもう一本も89らえる？」

「いいとも」と僕は言って、缶のふたを取ってやった。「あれからずっと砂浜を歩いてるんだろう？」

「そうよ」

「足の裏が熱くない？」

「大丈夫よ。私の足の裏はとても形而上学的にできているから。見てみる？」

「うん」

　彼女はすらりとした足をのばして、足の裏を僕に見せてくれた。それはたしかに素晴らしく形而上学的な足の裏だった。僕はそこにそっと指を触れてみた。熱くもないし、冷たくもない。彼女の足の裏に指を触れると、微かな波の音がした。波の音までもが、とても形而上学的だ。

　彼女と僕は何も言わずにビールを飲んだ。太陽はぴくりとも動かなかった。時間さえもが止まっていた。まるで鏡の中に吸いこまれてしまったようだ。

「君のことを考えるたびに、僕は高校の廊下を思い出すんだ」と僕は言う。「どうしてだろうね？」

「人間の本質は複合性にあるのよ」と彼女は言う。「人間科学の対象は客体にではなく、身体のうちにとりこまれた主体にあるのよ」90

「ふうん」と僕は言う。

「とにかく生きなさい。生きる、生きる、生きる。それだけ。私はただの―形而上学的な足の裏を待った女の子なの」

　そして1963／1982年のイパネマ娘はももについた砂を払い、立ちあがる。「ビールをどうもありがとう」

「どういたしまして」

　時々、地下鉄の車両の中で彼女に出会うことがある。そのたびに彼女は〈あの時はビールをどうもありがとう〉式の微笑を僕に送ってくれる。あれ以来我々はもうことばは交さないけれど、それでも心はどこかでつながっているんだという気はする。どこでつながっているのかは僕にはわからない。きっとどこか遠い世界にある奇妙な場所にその結びめはあるのだろう。そしてその結びめはまた別のどこかで高校の廊下やコンビネーション・サラダに、あるいは菜食主義者の「いちご白書」的女の子につながっているのだ。そんな風に考えると、いろんなことが、いろんなものが少しずつ懐かしく思えてくる。どこかにきっと僕と僕自身をつなぐ結びめだってあるはずなのだ。きっといつか、僕は遠い世界にある奇妙な場所で僕自身に出会うだろう、という気がする。そして91それはできることなら暖かい場所であってほしいと思う。もしそこに冷えたビールが何本かあるなら、もう言うことはない。そこでは僕は僕自身であり、僕自身は僕である。そのふたつのあいだにはどのような種類のすきまもない。そういう奇妙な場所がきっとどこかにあるはずなのだ。

　1963／1982年のイパネマ娘は今も熱い砂浜を歩きつづける。レコードの最後の一枚が擦り切れるまで、彼女は休むことなく歩きつづける。